

Sweet kiss Secret love

## 目次

Sweet kiss Secret love 5

番外編

Scarlet romance 253

Sweet kiss Secret love

「立花さんすみません！ もらってきた領収書、水たまりに落とされた上に人に踏まれて。一応乾かしたけど、見るも無惨なことになっちゃいました……っ」

そう言われ、立花香澄の目の前に差し出された紙は、かろうじて領収書の体を成している程度の、ひどい有様だった。

それを香澄はニツコリと笑って、受け取る。

「ああ、これなら大丈夫。金額も但し書きも読めるもの。出張旅費と一緒に申請してね」

「よかったあ。いつもありがとうございます……。あ、これお土産です。みなさんに配っておいでください。それからこれは、立花さんに」

安堵した様子の女性社員が、香澄のデスクに菓子折りと、それよりもやや小さな箱を置いた。

それは何種類かの佃煮が詰められた贈答用の箱だ。

「あ、これ、すぎき屋の佃煮詰め合わせじゃない。結構高いよね」

「いつもお世話になってるんで、そのお礼ですっ。立花さん、細かい食べものが色々詰め合わせになってるの、好きですよね？」

「うん、好き好き。わーい、ありがとう。いただきます」

小さな箱を両手で包むように受け取り、香澄は頬ずりする。

——立花香澄、二十六歳。入社六年目のベテランOLだ。

彼女は短大卒業後、海堂エレクトロニクス技術研究所・桜浜開発センターに事務職として入社した。それ以来ずっとサイバーセキュリティ研究開発部第一開発課の庶務を担当している。

社員のための事務仕事を一手に引き受ける日々はなかなか忙しいが、基本的に面倒見のいい彼女は、この仕事が自分に向いていると思っていた。

業務を滞りなく行えるよう社員を手助けするのは好きだし、彼女なりに各方面に気を配っているためか、多くの社員が出張などの土産を買ってきてくれるのも嬉しい。

土産は皆一様に『食べ物の詰め合わせ』だ。

というのも、香澄の趣味が食べ歩きだからだった。食べ歩きといっても、なんでもいいわけではない。『美味しいものを、少しずつ、数多く』食べるのが好きなのだ。

だからレストランや居酒屋に行けば盛り合わせを注文するし、お弁当は幕の内か松花堂を頼む。おしゃれなビアガーデンでは、何種類かを少しずつ試せるサンプラーを飲むことにしている。

いろんな味をよくばりに楽しむのがいい。

そういう香澄の趣味を、ほとんどの社員が知っているのだ。

今日も自分好みの土産をもらった香澄は、それを机の引き出しに大事にしまった。

「立花さん、ちょっといい？」

ちょうどその時、上司である第一開発課長の品川が、少し離れたデスクから香澄を呼んだ。彼女はすぐに返事をして彼のもとへ行く。

「なんでしょうか？」

「シアトルの研究開発センターから一人、うちに異動になるんだ。来週のお盆明けから来る予定だから、机と備品の準備、転勤費用精算のサポートをお願い」

「承知しました。机はどちらになりますか？」

「立花さんの斜め前。ほら、坂本くんがいた席」

このセンターでは、各部署、八つの机が二列に並べられた状態が一つの島と認識されている。その島を見渡すような形でもう一つ机が置かれており、そこを管理職か庶務が使うことになっているのだ。

香澄の右斜め前にいた社員——坂本は先頃、名古屋に転勤になった。以来そこは空席になっていた。

「分かりました。机の掃除をして、必要な備品を置いておきます。それからスマホと……あと名前が分かるのであれば、名刺の手配もしますが」

「あ、名前ね。ネットワークに辞令がアップされてるはずだけど……。メールで送っておくから、よろしくね」

品川がそう言い、机の上に置かれたパソコンを立ち上げる。

香澄は会釈し、自席に戻った。間もなく、ノートパソコンがメールの受信を告げる。品川からの

メールだったので、彼女は添付されたファイルを開いた。表示された辞令には『確水圭介』という名前が載っている。

「んと……名前は、と。……ウスイケイスケ、って読むのかな。名刺の注文は読み方を聞いてからにしよう」

ひとりごとのようにブツブツと呟きながら、総務部に読み方確認のメールを送る。それから社内用スマートフォンや備品の手配を済ませた。

一通り終わったところで、給茶機から緑茶を入れる。一息つき、パソコンの画面を眺めていると、再びメール受信のサウンドが鳴った。

先ほど問い合わせた転勤者の情報が届いている。

「あ、やっぱりウスイケイスケでいいんだ。あとはスマホの番号が分かれば名刺注文できる。……ん？」

そこで香澄は、ふと疑問の声を上げる。

「確水圭介って……どこかで聞いたような……」

転勤者の名前に聞き覚えがあった。つい最近ではなく、何年前に聞いた気がするのだ。

「うーん……どこでだったかなあ」

部署が違うとはいえ同じ会社に属しているのだから、名前を耳にしたことがあっても不思議ではない。だが、どこか引っかかった。

しばらく考えるものの、思い出せない。

「……ま、いつか。本人を見たら思い出すかもしれない」

香澄は、基本的に過ぎたことは忘れるようにしている。

日々の生活において、周囲から供給される情報は多すぎる。すべてを覚えてなどいられない。

そのため、どうでもいいことはあつという間に忘れてしまう。

仮にこの転勤者と過去に接触があつたところで、忘れているということは、大して重要な出来事ではなかったのだろう。

そう判断した香澄は、仕事に集中することにした。

その日の昼休み。

「香澄、聞いた？ あの碓氷さんが一開に配属になるって」

香澄が食堂から戻るや否や、隣の課にいる同期の藤田律子が席に came。律子の物腰は落ち着いているが、目は異様に輝いている。ちなみに一開とは、香澄が所属している第一開発課のことだ。

「碓氷さん……ああ、お盆明けから来る人ね。律子、知り合い？」

「うっそ、香澄知らないの？ 碓氷王子を！ 辞令を見たうちの課の女性陣は、みんなガッツポーズしてたわよ」

「へえ、そんなにカッコイイ人なんだ？」

「ちよつと香澄だったら、覚えてないの？ 見たことあるはずなのに。時々、桜浜にも出張で来てたよ？」

いまいちピンと来ていない香澄に、律子が不満そうにくちびるを尖らせた。けれど、香澄は特になん感慨もなく、納得する。

（ああ、だから名前に聞き覚えあつたのか）

出張でこのセンターに来たことがあるのなら、名前くらい耳にしてもおかしくない。

ただ、それでも碓氷の顔を思い出せないでいると、律子が親切にも説明してくれた。

曰く、異例の早さで本社から海外異動になった、とか。

曰く、本当は三、四年かかるはずだった海外勤務のプロジェクトを二年半程度で終わらせた、とか。

曰く、本人が桜浜開発センター勤務を希望した、とか。

どこから仕入れてきたのか、律子は碓氷の様々な情報を吹き込んでくる。香澄はそれを苦笑いで聞いた。

とある事情から、香澄は社内の男性にそれほど興味を持ってないので、反応も薄いのだ。

しばらくして一通り語り終えた律子は、満足したのか一息ついた。

「——はあ、いろいろ語ったら暑くなっちゃった。……ってというか香澄、よく長袖着てられるわね？ 冷房きいてるとはいえ、今日は結構暑くない？」

律子は、香澄が着ているカーディガンの袖を指差す。

「大丈夫ー。むしろ少し寒いくらい。だって、ここ冷房直撃するんだもん」

香澄はかなりの寒がりだ。夏でも社内ではカーディガンなどの上着を欠かさない。

さすがにこの八月上旬の猛暑の中、通勤する時は、半袖、もしくは七分袖を着ているけれど、会社では年間を通してほぼ毎日長袖で過ごしている。

「確かにここは涼しいわ。私がここに座りたいくらい」

律子が天井にある冷房の吹き出し口に手をかざした。

「それより律子、お盆は街田さんとハワイに行くんでしょ？ いいなあ、ハワイ」

彼女の話は終わったと判断した香澄は、パソコンを開いてログインしながら言う。

街田とは律子の彼氏の街田朔哉のことだ。彼は、律子と同じ課に在籍している。

香澄の知る限り、もう三年のつきあいになるだろうか。来年には結婚する予定らしく、律子と街

田はお盆休暇を利用してハワイに住んでいる街田の姉に会いに行くそうだ。

律子は、ぼつと明るい笑顔になる。

「お土産は任せて！」

「チョコレートかコナコーヒーの詰め合わせ、期待してる」

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、律子は自分の課へ戻っていった。

（律子も結婚かあ……）

香澄はふつと物思いにふける。

律子は香澄の同期ではあるが、大学卒なので二歳年上だ。

配属当初こそ敬語を使っていたものの、律子が嫌がったので、以来気の置けないつきあいをしている。さっぱりとした性格でスマートな美人の彼女とは、同期の中では一番仲がよかった。

来年開かれるであろう彼女たちの披露宴では、新郎新婦二人を知る人物として早くもスピーチを頼まれている。もちろん喜んで引き受けた香澄は、どんなことを話してやろうかと今から考えていた。

そんな香澄自身はと言えば、残念ながら彼氏はいない。過去にはいたこともあるけれど、ここ三年ほどそういう存在はなかった。

浮いた話がないわけではない。律子や街田を通じた合コンなどに参加してみて、連絡先を尋ねられたりもした。けれど結局おつきあいにまでは至らず。

ルックスはそう悪くないはずと、香澄自身は思っている。ものすごく美人というわけではないものの、つきあった人からであれば『可愛い』と言われたりもした。

肩より少し下まで伸ばした焦げ茶色の髪の毛のトリートメントは欠かさないし、日焼け対策をきっちりしているのも肌はきれいなほうだ。その他のパーツも、派手ではないが見られないことはない。

けれど『自分の一番のチャームポイントは？』——そう尋ねられて答えられるのは、手首のほくらだけだ。

左手首の内側にあるそれは、偶然にも三つきれいに横並びになっている。他人にアピールしてもそう嫌味ではなく、話のネタにもしやすい。実際、合コンでも話題にしたことがあった。

そんなふうにもだしなみや会話に気を遣っていても、地味だからか、恋人はできなかった。

もつとも、焦っているかと言えば、そうでもない。そこが一番の問題だ。『いい人がいればいいなあ……』程度の気持ちしか抱けない。

それどころか、最後につきあった男性が引き金となったトラブルを思い出すと、どうしても恋に臆病になってしまふ。

今は、趣味の食べ歩きや友達と遊びに行くことが一番楽しかった。

\*\*\*

「——シアトル研究開発センターから異動になりました、碓氷圭介です。これからどうぞよろしくお願いたします」

お盆休暇が明けたその日。碓氷圭介が、香澄のいる第一開発課へ姿を現した。彼の笑顔は、周囲の女性社員を軒並みとりこにする。

例年なら連休に一日二日有給をつけて休む女性が二人や三人いるもののだが、今年は全員が出勤していた。しかも普段よりもどことなく彼女たちの化粧が濃い。

しかも他の部署の女性までもが、碓氷を見にフロアの出入り口へ集まっていた。そわそわと色めき立っているのが、香澄にも伝わってくる。

(な、なんだ、その張り切りっぷりは……っ?)  
いつもと変わらない出で立ちの香澄は、面食らった。

確かに碓氷は、律子が言っていた通り、そんじよそこらでは見かけないくらい的美形だ。切れ長の瞳も、すつと通った鼻筋も、きれいなくちびるも、女性を魅了するに十分な要素を備え

ている。身長もスラリと高く、脚も長い。それに加えて仕事もできると評判なのだから、女性陣が張り切るのも無理はなかった。

それにしても——  
「猛禽類女子が目をギラギラさせてるわね」

いつの間にか隣に来ていた律子が、香澄に耳打ちする。  
「そ、そうだね……」

「香澄は普通だね。草食系女子？」

「そ、そういうわけじゃないよ。でも……」  
性格も分からない相手に張り切る趣味はないし、もう社内恋愛はしないと決めてるから——心の

中だけでそう呟く。  
そして、挨拶を終えて管理職と話している碓氷の顔を、まじまじと見つめた。  
彼の顔はどこかで見た覚えがある。

(どこで見たんだったかなあ……)  
きれいな横顔を見ながら、思わず首をひねる。

それから碓氷は、管理職に連れられて関係各所に挨拶へ行き、不在になった。

その間に香澄は総務部から受け取ってきた彼の社内用スマートフォン番号を再確認し、名簿に記載する。必要最低限の備品を用意し、転勤関連の書類もクリアケースに入れて彼の机に置いた。名刺は今日の午後には届くはずだ。



これで、確水の転勤に関する今日の仕事はほぼ終了となる。

数十分後、ようやく戻ってきた確水は品川に案内され、自席へ着いた。

「ああそうだ。うちの庶務さん紹介しておくね、確水くん。こちら、立花さん。事務手続きのことは彼女に聞くといいよ」

品川が確水に向かって香澄を指し示す。

香澄は立ち上がり、彼に頭を下げた。確水も彼女に向かって同じようにお辞儀をする。

「立花です。よろしくお願います」

「確水です。こちらこそ、お世話になります」

香澄が顔を上げると、確水の視線は下へ送られていた。

彼女の長袖の手元を見つめられている気がする。この暑さの中、カーディガンを着ているのが珍しいのだろうか。

「あの、何か……？」

あまりにじつと見ているので思わず声をかけると、確水ははっとしたように視線を上げ、ニコリと笑った。

「いえ、なんでもありません。転勤手続きとか、いろいろお手伝いしてもらおうと思いますが、よろしくお願います」

そう言って目を細めた彼を見た時、香澄はデジャビュのようなものを感じた。

(うーん……やっぱり)

どこかで会った気がしてならない。少し古い記憶が頭の奥で燻<sup>くも</sup>っている。けれど、どうしても思い出せなかった。

(ま、いつか。多分、大したことじゃないだろうし)

そう結論づけた香澄は、自席の引き出しからスマートフォンを取り出し確水に差し出す。

「これ、確水さんの社用スマホです。番号は設定画面で確認できます」

「ああ、ありがとうございます」

「名刺は今日中にお渡しできると思いますので」

「助かります。明日早々にメーカーとの打ち合わせが入っているんで」

確水は優等生の笑みを見せる。

それを見た周りの女性たちが、またうつとりとっていた。

その日、研究開発部の女性たちは、庶務でもないのに確水の世話を焼きたがり、課を越えて彼のもとへやってきた。

「分からないことがあったら言ってくださいね」

「よければ社食、ご一緒しませんか？」

「社内ご案内しましょうか？」

その声がいつもよりワントーン高いのは、香澄の気のせいではないだろう。

けれど、ハートがまとわりついたそんな誘いの数々を、彼はスマートに笑ってかわしていた。

「大丈夫です、ありがとう」

「同期と一緒に誘ってくれてるので」

「何度も出張に来ているので、大体は分かっていますから」

そして、確氷が異動してきた日は平和に終わっていった。

終業後、律子と街田に誘われた香澄は、ステーキハウスで二人と夕飯をともにした。

「わ、こんなにくれるの？ ありがとう」

律子からハワイ土産を手渡され、驚きと喜びの声を上げる。

その免税店の袋には、いろんなものが詰まっていた。彼女が希望した通り、チョコレートやコーヒーの詰め合わせ、化粧品やTシャツも入っている。

「俺と律子二人から、だから」

街田がビールを口にして笑った。

彼は確氷ほどイケメンではないが、すつきりとした、優しい顔立ちをしている。見た目の通り、性格も基本的には穏やかで優しい。しかも律子にぞっこんらしく、彼女に関しては決して妥協しない、固い意志を持っている男だそうだ。

土産を前に三人で盛り上がっているうちに、食事が運ばれてきた。

「お待たせしました」

テーブルに置かれたのは、さまざまな肉の部位のサイコロステーキと、エビフライやフライドチ

キンの盛り合わせだ。

これは店の裏メニューらしく、常連の街田が香澄のために注文してくれた。これとサラダとパスタを頼み、三人でシェアすることにしたのだ。

「わ、美味しそ！」

香澄が目を輝かせると、街田がそれぞれ取り分けてくれる。

「すごいや確氷も今日、社食でエビフライ食べてたよ。あいつ、揚げ物好きなんだよね」

皿にエビフライを載せながら、彼が言う。

「ああ。確氷さんが言っていた、一緒にお昼食べる同期って、街田さんのことだったんですね！」

彼から皿を受け取りつつ、香澄は納得の声を上げた。

「そうそう。女の子の誘いを断る口実にされちゃってんの、俺」

「モテる人は大変ですよね」

律子も街田に取ってもらったものを食べつつ、会話に参加してくる。

「ねー……すごいや確氷さんって、お兄さんがアメリカで事業やってるらしいわ。お兄さんの奥さんがアメリカ人なんだってね」

「そんなこと誰に聞いたのよ、律子」

そう尋ねた後、香澄はサイコロステーキを口にする。そして思わず「美味し〜」と呟いた。

「あくまでも噂よ、噂」

街田がフライドチキンを割りながらくつつくと笑った。

「確氷はあまり自分のことを話さないからなあ。余計に噂が立つんだろう」

「あ、でも海外勤務のプロジェクトは三、四年かかるところだったのに、二年半で終わらせて帰ってきた、っていうのはマジよ。半年くらい前にどうしても帰りたい、って力業で業務をまとめて赴任を終了させたんだって、向こうの開発部の子が言ってたもの。何があったのか、香澄は気にならない？ 朔哉、知ってる？」

ほうれん草のクリームパスタをフォークに絡ませた律子が尋ねる。

「俺もその辺りの事情は知らないんだよね。確氷、ほんとに忙しかったみたいで、帰国するまでほとんど連絡来なかったし。ただ、向こうの上司が泣いて引き止めた、っていう噂は聞いたよ」

街田は、クスクスと笑い続けている。香澄は感心して息を一つ吐いた。

「律子と街田さんの情報網にはいつも驚かされるよ、ほんと……」

情報通というのはどこにでもいるが、香澄の周囲では律子と街田の二人の右に出る者はいない。

一体誰から仕入れてくるのか、びつくりするような噂話や情報を話してくれる。そして、そんな彼らの情報に助けられることが度々あった。

「こういうの得意なのよ、私。でも、香澄は香澄で才能があるわよ……庶務の。私は、ああいう全方位に気を配る仕事はできないわー。香澄だからスムーズに回ってるんだと思う、あの課の事務処理」

律子が肩をすくめる。

「ありがと、律子。……あ、このエビフライ美味しい！」

友人に褒められ嬉しくなった香澄は、フライをひとくち食べて思わず声を上げた。  
「でしょ？ ここステーキハウスだけど、フライ系がうまいんだよ」  
「ほんと、サクサクだし、エビがジューシー！ これは常連になってしまえそう」  
この店は会社から少し離れた駅に存在しているので、香澄は訪れたことがなかった。街田に連れられて今回、初めて来たのだ。

街田は美味しいレストランについても詳しく、有名グルメサイト並みの情報量を誇っている。  
香澄はよくお世話になっては、裏メニューなどの恩恵に与っていた。  
「律子、これも美味しいよ」

街田が自分の皿にあったタラのフリッターを半分に切り、律子の皿に載せる。

「ありがと。……あ、ほんと、美味しい」

「ランチメニューだと、これのサンドイッチがあるんだよ。今度食べに来ようね。……つと、ん？ 何？ 香澄ちゃん」

香澄が二人を見てニヤニヤしていると、街田に声をかけられた。

「ふふふ。仲がいいなあ、って思ってた。幸せそうですね」

「ありがと。幸せだよ」

街田が律子と寄り添い、満面の笑みを湛えて告げた。

一番近くで二人を見てきた香澄は、心底安心する。そして、温かい気持ちで食事を進めていった。  
「——美味しくかったあ。ここ気に入っちゃったから、今度また来ようつと。裏メニューは一人じや

食べきれないから頼めないけど……」

盛り合わせを十分に堪能した後で、ひとりごとのように呟く。

「彼氏と一緒に来たらいいのよ、香澄」

律子がニヤリと笑う。

「……いないの知ってるくせに」

「作ればいいじゃない。香澄ならその気になればすぐできるわよ。……ねえ？ 朔哉」

香澄がくちびるを尖らせると、律子は街田に顔を向けた。

「そうだね。よかったら確氷とつきあえばいい。あいつ今、フリーだよ」

その言葉に香澄は一瞬、目を丸くする。けれどすぐ、堪えきれずに嘔き出した。

「やだ、なかなか面白い冗談言いますね、街田さん」

「冗談なんて言っていないのになあ」

ジョークなど滅多に言わない街田の口から、非現実的な言葉が飛び出たせいで、香澄は笑いが止まらない。

「確氷さんとおつきあいなんかしたら、周囲の嫉妬の炎で黒焦げになりそう」

自分が飛び抜けて美人だとか、可愛いだとかであれば、嫉妬の炎なんてものもしないだろうが。  
(いやいや、ないない)

香澄は自分が確氷とつりあうルックスではないことをよく理解していた。それに――

「――あつはははは、確かに！ アレは露骨すぎよねえ、みんな」

香澄の物思いを中断させ、ほのかに酔ったらしい律子が楽しそうに手を叩く。今日の女子社員たちの様子を思い出したようだ。

確かにみんな、見た目は可愛らしかったりきれいだったりが、闘争心を隠しきれていなかった。お互いを無言で威嚇し合っていたのだ。

その女の戦いに、まかり間違っても巻き込まれたりするものか――香澄は今一度、堅く決意した。もう二度と、あんな思いをしたくないから……

\*\*\*

香澄が律子と街田の二人と夕食をともにしてから、三日ほどが経った。

確氷は香澄のフォローを受けて転勤の手続きを終え、桜浜での仕事にも慣れたようだ。

相変わらず彼の周りにはハートマークを飛ばした女性社員たちが入れ替わり立ち替わりやってきては、あれやこれやと世話を焼こうとする。彼がそれをやんわりと断るのが見慣れた光景となった。

確氷の爽やかさたるや、そのまま清涼飲料水のCMに登場してもおかしくないほどだ。

女性の誘いを断る時でさえ、嫌味のない、それでいて毅然とした態度を取っている。お陰で周囲の無用な嫉妬や悪意をかき立てることは、ほとんどなかった。

そんな中、香澄は、あくまでも担当の庶務として確氷の手助けをしている。それ以上でも以下でもなく、だ。

「立花さん、時間がある時にでもこれ、配っておいでくれる？」

ふいに、課長の品川が菓子折を渡してきた。

昨日、名古屋に出張に行っていたので、その土産みやげなのだろう。大きな箱におせんべいがたくさん入っている。

「はい、分かりました。いつもありがとうございます」

「それからこれは立花さんに。こちらこそ、いつもありがとね」

机に置かれたのは、いろいろの箱だ。小さくはあるが、何種類もの味が詰め合わせになっている。「わっ、わざわざすみません！ありがとうございます、私、いろいろ大好きなんです」

それは、社交辞令でもなんでもなく、香澄の心からの言葉だ。いろいろやすあまのような和菓子が大好きなので、思わず笑顔になる。

（お昼に律子と一緒に食べよう）

香澄はニコニコしながらうぶや嬉しく受け取り、それを机の中へ入れた。

「それはよかった。——あ、そうだ。確水くん、来週の木曜日に東京でやるITエキスポだけどき。外国人向けの説明をする予定だった担当者が入院しちゃったらしくて。確水くんなら出展製品について詳しいし、英語も話せるから代わってもらえないか、って」

「来週の木曜ですか……はい、今のところ重要な予定はないので、私でよければ出席します」

ついでのように、品川が近くの席にいた確水に出張の打診をする。彼は手帳をパラパラとめくった後、そこに予定を書き込み始めた。

「あ、ほんと？ よかった。じゃあ担当管理職には連絡しておくよ。そっちから連絡あると思うからよろしくね」

毎年開催されるそのITのイベントには、香澄の会社も製品を出展している。海外からも多数の参加者が訪れるので、英語や中国語などの外国語で応対できる社員は重宝ちゆうぼうされていた。

今年のイベントに出展する製品の一つは確水が関わったものなので、それに関しての説明を依頼されたようだ。

第一開発課の社員は過去にも説明員として参加したことがある。その時、香澄がサポートをしていたので、大体の勝手は分かっていた。

だから品川が確水にその話をした後すぐ、総務に連絡し、イベントの概要が記載された書類やスタンプ証などを依頼する。そして、確水にはオンラインでの参加者登録をせんが促すメールを送った。

翌日。必要書類が届いたので、香澄はメモ書きした付箋ふせんを貼りつけ、確水の机に置いておいた。すると自席に戻った彼がそれを見て、声をかけてくる。

「立花さん、これありがとう。すぐく分かりやすいメモをつけてくれて、助かります」

「あ……いえ。不明な部分があれば遠慮なく聞いてください」  
本当は本人に直接手渡して説明したほうがいい。けれど香澄は、彼が席に不在がちであるのをいいことに、書類やメモを机に置いて済ませることが多かった。

だからせめて、説明書きくらいはきちんと分かりやすくしておこうとしたまでのことだ。

お礼を言われると恐縮してしまう。

「付箋にほぼ書かれてるみたいだから大丈夫だと……あ、そうだ。仕事と関係ない話でごめん、今週、シアトルで同僚だったアメリカ人がこっちに出張で来るんだけど、お土産に持たせられる桜浜名物とかあるかな？」

「名物、ですか……桜浜は実は隠れたぶどうの産地だったりするので、お菓子がいろいろありますよ。ゼリーとかお饅頭とか。駅のお土産屋さんで手に入ります。あと、以前出張で来ていたアメリカの方が、抹茶とピスタチオのサブレが美味しくて買ってましたね。これも駅で買えます」

「ああ……アメリカ人、抹茶好き多いからね」

「それから、桜浜名物ではないですが、唐辛子やわさびのおせんべいとか、おかきも意外に人気あるみたいです」

「そういうアメリカにもわさび味のお菓子とか売ってるな……そっか、ありがとう。さすがいろいろ知ってるね、立花さん」

「お役に立てればいいんですが。……私、ちよつと総務に用事があるので失礼しますね」

笑顔で会釈をしてから、香澄は提出用の書類を持って席を離れる。

確氷が配属されてから今日まで、むやみに彼に近寄らないようにしていた。

何かを尋ねられた時は快く応じているが、自分から話しかけることはしない。

一カ月も過ぎれば女性社員たちの確氷熱は多少落ち着くだろう。それまではこの戦法でやり過ぐすつもりでいる。

自意識過剰なのは分かっていたが、余計な騒動に巻き込まれたくないのだ。

こうして女子社員の嫉妬を招く行為を避けつつ、確氷が桜浜に慣れるようサポートし——彼が赴任してきて一週間ほどが経った。

お盆を過ぎたというのに、まだまだ盛夏にも似た暑さが続いている。

そんな最中、社内のエアコンが故障するという事態が起こった。幸いだったのは、故障が社内全館ではなく、香澄の所属する課だけだったということだ。

課員は涼を求めて空調の効いている会議室や他部署の空きスペースなどに移動している。

香澄だけが、仕事柄あまり移動できず、自席にいた。

他部署の友人が卓上扇風機を貸してくれたので、それを置き、開けられる窓は開放している。ただ、こんな状況では長袖など着ていられず、カーディガンを椅子の背もたれにかけていた。

「さすがに暑いや……」

軽く汗ばんだ香澄は、扇風機の風を顔に当てて大きく息を吐き出す。そこへ、ノートパソコンを抱えた確氷がやってきた。

「立花さん、第三会議室に客が来ているから、お茶出してもらえるかな。四人分おねが——」

そう香澄に告げかけた途端、彼は動きを止める。どうやら彼女の手元を凝視しているようだ。

「あ、はい、分かりました。……？ 確氷さん、どうかしました？」

手を団扇代わりにして顔を扇ぎながら香澄は立ち上がり、動かない確氷に首を傾げる。

「——つぱり、君だ」

「え？ ……っ！」

なんと言われたのか分からなくて聞き返すと、腕をいきなり掴まれる。

「——見つけた、俺のシンデレラ……！」

「っ、な、なんですか……？」

確氷は掴んだ彼女の腕をじっと見つめていた。どうやら左手首のほくろを見つめているらしい。彼の視線には、どこか執念めいたものが見え隠れしている。

(何この人、怖い……！)

背筋に寒気が走り、香澄は思わず確氷の手を振り払った。右手で左手首を隠すように握る。

「あいつ、第三会議室にお茶、ですよね!? 今、持っていきますからっ」

軽く会釈し、逃げるようにそそくさとその場を走り去った。

「つたく……シンデレラって何……!？」

普段は眩しくなるほど爽やかな雰囲気の確氷から感じた重いオーラに、香澄はこの暑さの中、身体を震わせる。

しかし自分の職務は遂行しなければならぬ。

深呼吸を一回すると、職場の冷蔵庫から麦茶を出し、四人分用意した。

「うう……これ出しに行くのやだなあ……」

会議室には確氷もいるだろう。あんなふう腕を振り払って逃げた後で顔を合わせるの、気ま

ずい。

それでも逃げ出すわけにはいかず、会議室へ向かう。

ドアの前で少し躊躇った後、軽くノックをしてそっとドアを開けた。

「失礼します……」

小声でそう言って部屋へ入る。

首に来客用のタグをぶら下げた人物が二人、そして品川と確氷がいた。香澄は小さく頭を下げ、各人にお茶を出す。

「……」

確氷が香澄の所作——というより、手首をつぶさに見ているのを感じた。

緊張すると同時にすごく恥ずかしくなった香澄は、お茶を出し終えさっさと会議室を出る。

「……疲れた」

直後、ドアを背にして、大きくため息をついた。

そして、急いで席に戻ると、暑いにもかかわらずカーディガンを着る。

自意識過剰かもしれないが、確氷の目に留まらないようにするためだ。

それから数十分して、確氷が再び自席に戻ってきた。香澄の服装を見て彼がクスリと笑っていたのは、おそらく気のせいではない。

(多分、他の誰かと間違えてるんだ……きつとそう、絶対そう！)

香澄は心の中で落ち着けと自分に言い聞かせた。

それから一時間ほど後、空調が直ったのと同時に課員が続々と部署へ戻ってくる。それにホッと  
して、彼女は長袖のまま庶務業務を続けたのだった。

昼間のことを忘れようと仕事に没頭し、その日、香澄は少しだけ残業をした。  
帰る支度をしていると、社内用スマートフォンがテキストメッセージを受信する。  
発信者は確氷だ。

香澄はドキリというよりギクリとした。斜め前にいる彼にこれといったアクションはなく、普通  
に仕事をしている。

無視をするわけにもいかなないので、香澄はとりあえずメッセージを開いた。

「今日、これから時間ありますか？」

メッセージにはそう書かれている。

（何!? ちょっと怖いんだけど……!）

もう一度チラリと確氷を見ると、心なしか口元が緩んでいる。と同時に、再びメッセージの受信  
音が鳴った。

「仕事の件で相談したいことがあります。立花さんの好きなレストランでよいので、この後食事の  
時間を取ってもらえますか？」

乗り気にはなれないが、『仕事の件で』と言われると、無下に断るわけにもいかない。

香澄は恐る恐るスマホを操作して返信した。

「少しなら……」

そんな書き出しで、先日律子たちに連れていってもらったステーキハウスを指定する。

あの店は会社から離れている上に、個室とまではいかないもののボックス席がある。別々に行け  
ば、会社の人間に確氷と一緒にいるところを見られることはおそくない。

了解です。その店なら知ってるので、俺の名前でボックス席予約しておきます」

すぐにそう返信が来たかと思うと、彼は目配せもせずに立ち上がる。  
「お先に失礼します」

金曜日なので食事に誘いたくて仕方がない女性陣が近づく中、それを無視する形でニッコリと笑  
い、さっさとフロアを後にした。

女性から誘われることが多いのであるう確氷は、あしらい方が潔い。

（バツサリ切っていくなあ……）

一連の流れを見て、香澄は思わず口元を引きつらせた。

少し時間を置いた後、香澄も荷物をまとめて「失礼しまーす」と挨拶をし、職場を出る。

彼女の自宅は会社から私鉄に乗って七駅ほど北に進んだ町にある。今日の目的地はその三駅ほど  
手前だ。

いつもは降りない駅で下車し、そこから徒歩で五分ほどのところに、確氷と待ち合わせをしてい  
る『ステーキハウス・オオムラ』はあった。

扉を押し、顔を覗かせるようにして店に入っていく。



近くにいた店員に予約の旨を告げると、奥へ案内される。あまり目立たないボックス席で、すでに確氷が待っていた。

香澄の姿を見た途端、ぱあっと輝くような笑顔を見せる。

「お、お待ちせしました……」

「急に誘って悪かったね、立花さん。来てくれてありがとう」

「いえ……」

ぺこりと頭を下げ、香澄は彼の前へ腰を下ろした。

「なんでも好きなもの頼んで。もちろん、俺が出すから」

「はあ……」

メニューを差し出されたので、おずおずと開く。

(あ……そうだ)

そしてふと思いい立ち、確氷の顔を見た。

「確氷さん、ちょっと注文したいものがあるんですが、一人じゃ食べきれないので、一緒に食べてもらっていいですか？」

「ん？ いいよ」

少ししてやってきた店員に、先日街田が頼んでくれた裏メニューの盛り合わせを注文する。

(せっかくなので注文できたんだし、食べる時くらいは楽しんでやるんだからっ)

相談ごとを聞く前に、食べたいものを食べてやろうと、香澄は気合を入れた。

すぐに出された盛り合わせは、やつぱりどれもこれも美味しそう。それを取り分けながら、彼女は口元が緩むのを抑えきれなかった。

「へえ……一皿でいろんな肉が食べられるんだ。こんな裏メニューがあるなんて知らなかったなあ」

確氷が目を丸くして感心している。

「私もつい最近知ったんです。街田さんに教わったんですよ」

「えー。街田、俺には教えてくれなかった……友達なのに」

悔しそうにくちびるを尖らせる、そんな姿も様になるのだから、美形というものは得だ。

「同期なんですってね、確氷さんと街田さん」

「そうだよ。同期の中で気が合う三人組でね、俺たち」

「三人……？ ってことはもう一人いるんですね。どなたなんですか？」

「第二開発課の織田だよ」

「えっ、あの織田さんですか？」

香澄は驚きで目をぼちぼちと瞬かせた。

「そう、あの織田尚弥。立花さん知ってるんだ？ あいつのこと」

織田は確氷と並んで海堂エレクトロニクス技術研究所のイケメンと評される社内の有名人だ。隣の課に所属していることもあり、香澄も面識がある。

「そうだったんですね」

「——つと、できたてが冷めちゃうな。食べようか」

「はい。いただきます」

香澄は手を合わせてから、皿に載ったエビフライを口に運ぶ。

「ん〜、やっぱり美味しい〜」

(サクサクの衣ころもにタルタルソースを絡めて食べるのがたまらない)

「このエビフライ、初めて食べるけど美味しいな。ステーキハウスなのにエビフライがうまいって、どういふことだ……」

確氷が笑いながらエビフライに舌鼓しつこづを打つ。

「あ、これも美味しい！」

彼が注文してシエアしてくれたイカのフリッターを口にした香澄も声を上げた。

「俺はここへ来ると、いつもそれを注文するんだ。気に入ってもらえてよかったよ……それにしても」

そう言った後に、確氷がクスリと笑った。何か無作法でもあったのかと、香澄はドキリとする。

「な、なんですか……？」

「立花さん、なんでも美味しそうに食べるんだな。見ていて気持ちがいいくらい」

「あ……わ、たし、趣味が食べ歩き、で。こういうふうには、盛り合わせとか頼んで、いろんなものを食べるのが好きなんです。レストランを、はしごすることもあったりして……」

香澄に好き嫌いは一切ない。大食いではないものの、出されたものはどれも口にしたいし、なん

でも美味しくいただける自信がある。

今もテーブルに載っているすべての料理を堪能たんのうしていた。

揚げ物からサラダやおつまみに至るまで、躊躇ちゆうちよすることなく口に運ぶ。

もしこれが合コンの席であれば多少ネコをかぶるが、今日は別に取り繕ととう必要がない。正直に自分の趣味のことを打ち明けると、確氷がニッコリと笑った。

「これも美味しいから食べてみて」

彼はたった今来たばかりのベイクドポテトを小皿に取り分け、香澄に差し出す。

「あ、はい。……美味しいです！スパイスが効いてますね」

「だろ？ これも俺のオススメ。この店、本当にうまいよな。立花さんがここを指定してくれてよかった」

そして、邪気のない笑顔でそう言った。

(結構、いい人……かも)

街田の友人なのだから、悪い人間とは思えない。

彼がなんのために自分を呼び出したのか分からないというのに、早くも香澄の気は緩ゆるみかけていた。

食事が終わり、確氷が香澄のためにこれまた裏メニューのデザートデザートの盛り合わせを頼んでくれる。コーヒージェリーやアイスクリーム、チーズケーキやフルーツなどが載っているプレートだ。

「わあ、美味しそう……」

香澄は目を大きく見開いた。甘いものにも目がないたため、もちろん別腹がスタンバイしている。律子たちと来た時はデザートは食べなかったから、この店のデザートは初めてだ。

早速口にする、どれも美味しい。

「ん、幸せ」

チーズケーキを食べた彼女は、声を上げる。

「幸せそうだね」

「すつごく美味しいです。ステーキハウスなのにデザートも美味しいんですね、ここ。あー、ほんとに幸せ」

満面の笑みでそう言った時、ふと思いついたことがあった。

「あ、そういえば碓氷さん。相談があるって……」

フォークを置き、香澄は碓氷を見る。

彼は「ああ」と呟き、申し訳なさげに謝罪を口にした。

「ごめん、実は仕事の話じゃないんだ。さっきはあんなふうにメッセージを送ったけど、それでも言わないと時間を取ってもらえないと思って」

「はあ……。で、お話って？」

「実は立花さんにお願ひがあるんだ」

「なんでしょう？」

神妙な表情で切り出され、香澄は居住まいを正す。

「君の手首を見せてほしい。できれば触らせてほしいんだ」

「……はい!?」

何を言われているのか理解できずに、香澄はポカンと口を開いたまま固まる。対して碓氷は、それはそれはきれいな笑顔を見せた。

「もう一度言うよ。手首——君の手首が見たい。可能であれば触りたい」

「ど、どうしてですか……?」

理由を聞く資格はある。香澄は眉根を寄せたまま、碓氷を見つめた。睨めつけた、と言ったほうがいいかもしれない。

彼を見る目が瞬時にして胡乱なものになっている。

すると碓氷が、大仰にため息をついてみせた。

同情を引くためだろうか。どこかわざとらしさを感じる。

「俺ね……重度の手首フェチなんだよ。女性の身体でまず見てしまうのが手首、っていうくらいに」

「……」

香澄はいきなりの性癖告白に呆然とするしかない。

口を閉じるのを忘れ、目の前の男を凝視した。

曰く、碓氷は手首フェチではあるけれど、誰のでもいいわけではない。彼の中には『理想の手首』というものが存在しているようだ。

「——ただ、今までそんな手首の持ち主には出逢えたことがなかったんだ」  
（ん？　　今までなかったか　——過去形、ってことは……）」

彼の発言に、香澄ははたと気づく。

「……もしかして——」

「そう、そのもしかして、だよ。こんな近くに理想の手首の持ち主がいたなんて、神様っているもんなんだね」

（わ、私が理想の手首の持ち主ってこと〜!?）

混乱を極めている彼女をよそに、確氷は優雅な所作で食後のコーヒを口にしている。

香澄もひとまず気持ちを落ち着かせるために、デザートと一緒に頼んだアイステイーをひとくち飲んだ。ほう、と息をつき、チラリと目の前の確氷を覗き見る。

彼は笑顔に爽やかさを増して、彼女の反応を待っているようだ。

「……あの」

「何？」

「……そんなに簡単にそういうこと話しちゃっていいんですか？　もし私が、今聞いたお話を会社でバラしたらどうするつもりなんです？」

わずかな沈黙の後、香澄は意地悪な言葉を投げかけた。すると彼は、さらに意味深な口調で意外なことを言い出す。

「立花さんって……俺のこと、避けてるだろ」

「え……?」

「最初は嫌われてるのかなあ、と思ったけど、とげとげしい雰囲気は感じられない。でもやっぱり、他の社員には手渡しするのに、俺の書類はない間に机に置かれてたりする。ただ、貼られてる付箋には親切に説明をぎつしり書いてくれた。それで思ったんだ。ああ、これは他の女性社員の手前、俺に接触しないようにしてるのかな、って」

「あ……」

避けていることがバレていただけでなく、行動理由まで見透かされている。香澄は少し恥ずかしくなった。

視線を下に向ける。

「立花さんのそういうところとか……それからここ一週間の仕事ぶりや他の社員への接し方を見てきた。君は他人のプライバシーを安易に吹聴するような女性じゃない。……違う？　　こう見えて俺人を見る目はあるつもり」

もちろん香澄に、確氷の性癖について他言するつもりなんて毛頭ない。それもお見通しだったのかと思うと、恥ずかしさがさらに増した。

「……まあ、言いませんけど」

確氷に手首とはいえ執着されているなんて会社の女性社員に知られたら、彼の評判が下がる以前に自分がどんな目に遭うか分からない。元々言えるはずなんてないのだ。

「——とまあ、そんなわけで……どうかな？」

「どうか、つて？」

「俺に君の手首を触らせる気、ない？」

「つ、そういうば……少年漫画でそういう悪役、いませんでしたっけ……？」

香澄は以前、律子の弟に借りて読んだ漫画を思い出した。それに出てくるラスボスが、きれいな女性の手にも異様な執着を持っているキャラクターだったのだ。読んだ時には背筋がゾゾツとなった。

それと同じような寒気を今この瞬間、感じ始めている。

碓氷が爽やかさをまとったままでいるのが、ことさら寒々しさを演出していた。

「ああ、アレね。読んだことあるけど、さすがにあそこまではね……」

どうやら碓氷もその作品を知っているようだ。香澄の話聞いて、苦笑しながら肩をすくめる。

「……私の手首の、どこがいいんですか？」

「太くなく、極端に細すぎもせず、筋の伸び具合とか骨の出っ張りとかが理想的。何より、そのほくろ。三つきれいに並んでるっていうのが、本当に稀少。ほら、泣きぼくろが好きなんっつているだろ？ 俺は手首のほくろが好きなんだよね」

(まったく理解できない……)

香澄は自分の手首をまじまじと見つめた。

確かに手首のほくろを話のネタにすることはあるけれど、自分がそこに何かを感じるかと言えば、それは決してない。

「ほんとに……君の手首はたまらない……」

香澄の手首に視線を向けたまま、碓氷がうつそりと呟いた。その表情は、見たこともないくらいにとろけている。

(ひいっ)

背筋に悪寒を感じた香澄は、ガタツと音を立てて立ち上がった。

「あのっ、し、失礼しますっ。……ごちそうさまでした！」

深々と頭を下げ、隣に置いてあったバッグを掴むと、その場を逃げ出す。

(危ない……！ あの人、危ないよ……！)

店を出てまっすぐ駅に行き、電車で自宅へ向かった。

一人暮らしのアパートは、最寄りの北名吉駅から歩いて十五分ほどのところにある。

香澄は部屋に入って、ほうと息をついた。ようやく肩の力が抜ける。

「碓氷さんが……あんな変態チックな人だったなんて……。いい人だなあ……つて、ちょっと思ってたのに……」

香澄はガツクリと肩を落とした。

眉目秀麗、仕事の能力にも秀でていいるという完璧な男性なのに、重度の手首フェチだとは――

衝撃的な事実だ。

しかも香澄の手首を理想だと言いつつ、

喜んでいいのか悲しんでいいのか、複雑な気持ちだ。

いずれにしても関わらないのが賢明だ、と彼女は思う。  
これ以上彼に近づけば周囲の要らぬ嫉妬を買ってしまうことが、火を見るよりも明らか。やっかいことを背負い込むのはごめんだ。

いきなり退席してしまった謝罪と、ごちそうになったお礼は、明日伝えればいいだろう。

彼のプライベートの連絡先など知らないのです、今夜中に伝えるのは不可能だ。

「突然あんなこと言われたんだから、失礼はお互いさまよね」

香澄は自分にそう言い聞かせた。

\*\*\*

「おはよう、立花さん。偶然だね」

翌日。朝の北名吉駅に着いた途端、香澄は後ろから肩を叩かれた。

彼女はいつも音楽を聴きながら通勤している。他人に迷惑をかけない程度のボリュームに抑えているつもりだが、普通に声をかけただけでは気づかなかったのかもしれない。

彼女がびつくりして振り返ると、そこには確氷がいた。

ギョツとしながら、香澄はイヤホンを外す。

「う、確氷さん……おはようございます……」

(ま、まさかストー——)

待ち伏せをされていたのかと、口元を引きつらせた。

けれど確氷は、ほんの少しだけ驚いたような声で言葉を継ぐ。

「俺のいつも乗る駅、本当は日月なんだけど、今日たまたまここに用事があつて寄つてたんだ。立花さんは北名吉に住んでるんだね」

彼は隣の駅名を挙げて、偶然を喜んでいるみたいな嬉しそうな表情をした。

(あ、そうなんだ……そうだよ。私住んでるところ教えてないし……)

安堵感と自意識過剰に対する軽い自己嫌悪で、香澄の心は入り乱れる。複雑な気持ちを抱きつつ改札に向かうと、確氷が隣に並んできた。

「あ、の……昨日はごちそうさまでした。すみません、いきなり帰ってしまった……」

「いいんだ。俺がいきなりあんなことお願いしちゃったんだから。……で、どう？ 考えてくれた？」

自動改札を通つた後、再び隣に来た彼は、香澄の顔を覗き込む。彼女は慌ててかぶりを振つた。

「え、む、無理です……っ」

「嫌なの？」

断られたのが意外だ、とでも言いたげにそう尋ねられ、香澄は軽く眉根を寄せる。

「嫌じゃない人がいると思います？」

「えー。今まで断られたことなかったけどなあ」

確氷は過去にも何度か、理想に近い手首を持つ女性に同じことを頼んだ経験があるらしい。

断られたことはなく、彼女たちはむしろ喜んで手首を提供してくれたという。

(そりゃあ……)

確氷のことが好きな女性なら、それを受け入れるかもしれない。

断って嫌われたくはないだろうし、彼に触れられることに喜んで手を差し出した女性もいたに違いないかった。

でも、香澄は確氷のことが好きではない。

嫌いというわけでもないが、そもそも好き嫌いを語れるほど彼のことを知らないのだ。

昨夜はむしろ、彼の性癖を聞かされてドン引きした。

だから断ることで彼にどう思われようが、かまわない。

ホームに着くとちょうど電車が来たので、二人で乗り込む。確氷は当然のように香澄の隣に立ち、小声で彼女に話しかけた。

「もちろんタダで、とは言わないよ？ お礼はするつもり」

「いやいやいや、何かもらっても無理ですから」

「そう？ うーん……困ったなあ……」

(困ってるのは、こっちだからー！)

苦笑いする様子ですら、確氷はとても爽やかだ。香澄は拒否している自分が悪いような気になり、まいってしまふ。

「……ところで、立花さんって、街田の彼女の律子ちゃんと仲がいいんだって？ 昨日、街田から

聞いたんだけど」

これ以上電車の中でする話ではないと踏んだのだろう、彼が話題を変えた。

「仲よくしてもらってます」

「立花さんは？ 彼氏いるの？」

「……いません」

「そっかそっか、よかった」

「っ!？」

一瞬ドキッとしてしまった自分が情けない、と香澄は内心で悔しがる。どうせそれに続く言葉は分かっているのに。

「だって、さすがに彼氏いる子に、あんなこと頼めないからさ」

(やっばり……)

予想通りの言葉に、苦笑いした。普通、あんなことを頼む前に尋ねるだろうとも思ったが、口にはしない。

「そう言う確氷さんは、彼女いるんですか？」

先日、街田が『確氷はフリーだ』と言っていた気がするが、あえて尋ねる。

「ん？ 今はいないよ」

「ですよー。さすがに彼女いる人が、他の女性にあんなこと頼めませんよー」

少しばかり意地悪い表情で確氷の言葉を真似て、そう言ってみた。

「あははは。だよね」

碓氷は平然とした顔で返し、それから、世間話と会社の話をした。

そうして電車が桜浜の駅に着く。ホームから改札に向かって二人で歩いている時、後ろから声が聞こえた。

「碓氷さん！」

振り返ると、同じ部署の須永美里すながみさとがいた。彼女は、人混みに身体をねじ込むようにして碓氷の隣に陣取る。

碓氷に熱を上げる女子社員の中でも特に力が入っているように見える彼女は、ふわふわと可愛らしい容姿で、男性受けするタイプだ。元々身だしなみに気を遣っている女性ではあるのだが、彼が赴任してきたからはおしゃれに一段と磨きがかかっている。

男性社員からの人気がある彼女だからこそ、碓氷の美貌に臆することなくアプローチしていけるに違いない。

「ああ、おはようございます」

「立花さんもおはようございます！」

「あ、おはよう」

須永は香澄より入社は二年後輩なのだが、四大卒なので年齢自体は同じだ。可愛らしい見た目に似合わず、性格は少々きつい。

今も爽やかに挨拶をしてきたものの、香澄に向ける視線には敵意めいたものを宿らせていた。

(こういうことになるから……！)

香澄は軽く唇を噛む。

碓氷との距離が近くなるということは、それだけ彼を慕したっている女性に睨にらまれる確率が高くなる危険性を秘めているのだ。

「碓氷さんは、今日は立花さんとご一緒だったんですか？」

須永が大きな目を見開き、探るように尋ねてくる。

「電車でたまたま会ったんで、仕事の話をしてたんです。……ね？ 立花さん」

「は、はい……っ」

同じ駅から乗ってきたなどと言えば、変に勘ぐられるかもしれない。それに碓氷も自分の住居の情報を安易に提供したくはないのだろう。

彼はあくまでも車内であたり会ったという体ていで話をしてた。香澄にとっても、それはありがたい。

内心ホツとしつつ、香澄は人混みを利用してさりげなく碓氷と須永から離れる。

そして会社に向かって歩きながら、ふと気づいた。

(——でも私には日月に住んでるって言ってたなあ、さつき)

須永にはばかりしていたけれど、香澄には隣の駅を利用しているとはっきり言った。

昨夜食事をした時、彼は、香澄を口が堅い女性だと認識していると発言をしている。そのせいかもしれない。



あんな性癖を暴露するくらいだ。住んでいる場所をバラす程度どうってことないと思っただけに違いなかった。

(ともかく、昨日碓氷さんが話していたことは、誰にも言わないようにしなきゃ)

これは彼のためなどではなく、自分のためだ。

女の争いに巻き込まれたくないがゆえの自己防衛。

取り戻した平穏な生活を、二度と乱したくはない。

やっぱり碓氷には極力近づかないようにしよう——香澄は改めてそう誓った。

「……」

その日の終業後。社用スマホのディスプレイを眺めながら、香澄はため息をついた。

「昨日の件、了承していただけたら嬉しいです」

香澄の堅い決意を嘲笑うかのように、碓氷がメッセージを送ってきた。すぐ目の前に座っているのに、だ。

当の本人は香澄に目を向けることなく平然と自席で仕事をしている。

「申し訳ありません」

それだけ返信する。

「どうしても？」

今度はそう返ってきた。

「どうしてもです」と打って返信しようとする、須永をはじめとした女性社員が数名、碓氷のもとへ駆け寄っていくのが見えた。

香澄は慌てて文面を消し、スマホを伏せる。

「碓氷さん、この後飲みに行きませんか？ 素敵なお店見つけたんですよ」

「あー……すみません、嬉しいお誘いなんですけど、今、家族がこっちに來ているので、都合が悪いです」

碓氷が眉尻を下げつつ須永の誘いを断るが、彼女は控えめな口調で食い下がった。

「それじゃ、もしよければご家族も一緒にどうですか？」

「親戚の集まりとかいろいろあるので、すみません。また今度誘ってください」

碓氷は愛想よく笑うと、手早く荷物をまとめて「お先に失礼します」と周囲に告げ、職場を後にした。

「碓氷さん、なかなかつきあってくれないよねえ」

「ほんとは彼女いるんじゃない？」

「嘘、いないって聞いたよ？」

「それって本人から？」

「違うけど……」

女性たちが、口々に言いながら残念そうに去っていく。

碓氷は嫌な顔一つしていなかった。毎日のように誰かしらから誘われているというのに、すべて

に誠実に対応している。

よく切れずにいられるなあと、香澄は感心した。

(モテるっていうのは大変だ……)

やれやれと肩をすくめ、帰り支度をする。会社を出て電車に乗り、北名吉で降りた。すると、改札口を出たところで、碓氷に肩を叩かれる。

「立花さん」

「碓氷さん？」

「やっぱり会えた」

香澄はイヤホンを外して対応した。

「え……もしかして、私を待ってたんですか？ ご家族と約束があったんじゃない？……？」

「ああ、家族が来てる、っていうのは嘘」

碓氷が悪戯いたずらっぽく笑った。

家族をだしに使えば、引き下がってくれると思ったと言う。

「それでも食い下がってくる子もいるんだね。女性ってすごいな」

「はあ……」

もっともらしい態度と言葉で女性たちに弁解していたから、香澄はすっかり彼の言葉を信じていた。

(断り慣れているなあ……)

素直に感心する。

そうできるようになるまでには、いろいろと苦労があったのかもしれない。

碓氷の表情を見ていたら、なんとなくそう思った。

「まあでも、家族——というか親戚と約束があったのは、ほんと。従兄いとこが北名吉に住んでるんだ」

「そうなんですか」

「ああ。だから、従兄いとこの家に行く前に、立花さんにもう一度お願いしておこうと思って」

そう言っつて、彼が首をちょこんと傾げる。可愛さを演出しているらしい。

「え……だから無理ですって」

「別に裸を見せて、つて言ってるわけじゃないのに」

「あの……もう、その発言の時点でセクハラですからからね」

「あははは、そういえばそうだな。……でもね、こう見えて俺も必死なんだ。諦めるつもりはないよ」

セクハラだと認めたものの、彼は怯む様子もなく堂々と言い放つ。宣言通り、引き下がるつもりはなさそうだ。

「そんなこと言われても……」

香澄は言葉尻を濁してうつむいた。

ここで「それじゃあ、仕方がないので触ってもいいですよ！」なんて言えるはずがない。

「ともかく、もう一度よく考えてほしい。……じゃあ」

そんな彼女の肩をポン、と叩き、確氷がきびすを返す。

「あ、う、確氷さん……!!」

「よろしく!」

笑顔で香澄に手を振り、走っていった。

その後ろ姿までもが、実に清々すがすがしい。

「うう……」

(まったく、涼しげな顔でなんてこと頼んでいくのよ〜!)

香澄は困って頬をふくらませたのだった。

それから、確氷は何かと香澄に接触してきた。

会社でメッセージを送ってきたり、出張精算書に貼りつけた付箋ふせんに「例の件、お願いします」

と書いてみたり、自席でパソコンにとらめっこしたまま「どうしたらOKもらえるのかな……」と、聞こえよがしに呟つぶやいてみたりする。

さりげなく、それでいて確実に香澄の目や耳に入る形で訴えてくるのだ。

その度に彼女は断ったり無視したりするのだが、めげる彼ではない。

そんな一連のやり方に困らされてはいるものの、香澄の中で確氷の株が少しだけ上がっていた。というのも、彼のアプローチはすべて周囲の目につかない形で行われているからだ。

誰に見られることも聞かれることもなく、ほぼ水面下で接触してくる。エンカウントするのは、

必ず北名吉駅近辺だ。

これは確氷が彼女を気遣ってくれてのことなのだろうと分かっていた。

開発センターでもかなり目立つ存在である彼が堂々と香澄に言い寄ろうものなら、彼女は女子社員の嫉妬あつの的になる。

そういった自分の影響力の大きさを、彼は十二分に理解している。

「気を遣ってくれてるのか、強引なのか、よく分からない……」

香澄はぼつりと呟つぶやく。

そして、彼女の手首に対する確氷の執着はかなりのものらしい。

ある日彼は、ついにワイルドカード級の条件を提示してきたのだった。

「——香澄ちゃん、今日こそ返事を聞かせてもらおうから」

「返事ならとつくにしています……っというか、どうして名前と呼ぶんですか?」

「ここ一週間でだいぶ親しくなった感ない? 俺ら」

「そうでしょうか」

あれから一週間が経った週末。香澄は大事な話があると確氷に言われ、北名吉駅で待ち合わせさせられた。

二人は、駅前から少し奥まったところにある、会社の人間には出くわしそうなクラシックな雰囲気のカフェに入る。